

# 市史通信

## 【目次】

- 「野毛山の『昭和』」  
—坂と公園の物語—
- 資料室所蔵旧公図の概要
- 占領下の米軍施設①
- 新刊紹介
- 市史資料室たより



1960年代の野毛山 1969年頃 アマノスタジオ撮影 広報課写真資料

## 第11号

【発行日】2011年7月31日  
 【編集・発行】横浜市史資料室  
 〒220-0032  
 横浜市西区老松町1番地  
 横浜市中央図書館・地下1階  
 【電話】045-251-3260  
 【FAX】045-251-7321  
 【E-mail】  
 so-sisi@city.yokohama.jp  
 【ホームページ】  
 http://www.city.yokohama.lg.jp/  
 somu/housei/sisi/

## 展示会 野毛山の「昭和」 —坂と公園の物語—

横浜市西区の南端に広がる野毛山には、「憩い」や「学び」、「娯楽」を求め、多くの人々が訪れる。休日ともなれば、野毛三丁目交差点から公園にむかう野毛坂の往来は活気を増し、山頂の広場では弁当を広げる家族の姿も見受けられる。開放的な野毛山動物園、蔵書数約一五〇万冊を誇る横浜市中央図書館など、野毛山に所在する公共施設が人々を野毛山へ誘っているのだろう。

それでは、野毛山はいつ頃から人々が集う空間になったのか、また、市民にとって野毛山とはどのような空間だったのか。一九二三（大正一二）年九月の関東大震災以降、野毛山は時代の変化とともに、その性格を変えてきた。今回は横浜市史資料室所蔵の写真資料を中心に、昭和期の野毛山の変化を追想していきたい。

### 一、野毛山の開拓

開港以前から人々は野毛浦に面した標高約五〇メートルの丘陵を「野毛山」と呼んできた。一八五九（安政六）年の横浜開港とともに、江戸幕府は東海道の新芝生村から戸部村、野毛の切通しを経て開港場へ至る道路（横浜道）を整備、それに伴い、交通の要所となつ

た野毛坂周辺には多くの人々が住むようになった。

明治維新後、野毛の丘陵には様々な施設が造られる。一八七三（明治六）年一二月、現在の老松中学校の位置に横浜共立病院（後の十全医院）が完成したほか、翌年には現在の中央図書館の位置に自強学舎（後の老松小学校）が建設され、一八七六（明治九）年二月には、一帯の名称が「老松町」と定められた。名称は老松の多い景勝地に由来するという。また、同年に附近に住の植木屋の発案で、植物園と遊園地を兼ねた「四時皆宜園」が現在の野毛山公園北部に開園、園内の迷路は話題を集めた。しかし、同園は一八八三（明治一六）年に廃園となり、敷地は豪商の邸宅地へと引き継がれていった。

明治中期になると、居留外国人の生活空間である山手の丘陵に対し、野毛の丘陵は日本人豪商の生活空間となった。原善三郎や茂木惣兵衛、平沼専蔵など、横浜を代表する豪商たちが大規模な邸宅を構える。現在の野毛山公園入口にある亀甲積擁壁（横浜市認定歴史的建造物）は、かつての平沼邸の一部である。また、一八八七（明治二〇）年の水道整備の一環として、野毛山頂上付近に浄水場が建設され、その辺りは「水道山」と呼ばれるようになった。野毛山は横浜市内に水道水を供給する重要な拠点となっていく。

一方、野毛山には「憩い」の空間としての性格も加わる。東京湾から房総



野毛坂の罹災状況 1923年9月頃

左右田宗夫家資料

半島の山々を一望し、かつ庭園内に多くの植物を有する茂木邸は、横浜の景勝地の一つとなり、菊花の咲く秋には市民にも開放された。庭園の菊花は茂木家の屋号・野澤屋に因んで「野澤の菊」として親しまれ、市民の眼を楽しませた。関東大震災後、茂木邸の敷地は野毛山公園に組み込まれていくが、「憩い」の空間としての素地はそれ以前から存在したのである。

## 二、関東大震災と震災復興

一九二三（大正一二）年九月一日午

前一一時五八分、相模湾西方沖を震源とするM7・九の地震が発生し、激しい揺れが横浜市街地を襲った。野毛坂で罹災したフェリス和英女学校生徒・寺田三千代は、「ゴーツと云ふ何とも云へぬ物凄い音が切通しの方から響いて来ました」と、地震発生の瞬間を回想している（フェリス女学院一五〇年史編纂委員会編『関東大震災 女学生の記録』フェリス女学院、二〇一〇年）。続いて発生した火災は強風に煽られて急速に燃え広がり、市街地の大部分を焼き尽くした。野毛山には火災に追われた人々が逃れてきたが、同時に炎も野毛切通しや野毛本通り方面から迫り、十全医院や老松小学校に燃え移った。野毛山周辺は広い庭園や道路沿いの石垣が防火帯となった平沼邸を除き、そのほとんどが火災によって失われてしまった。

その後、復興事業の進展によって高級住宅街であった野毛山は姿を大きく変える。交通に関しては、野毛坂や野毛切通しの整備だけでなく、新たに野毛坂交差点から日ノ出町を結ぶ道路も整備され、一九二八（昭和三）年には山元町から日ノ出町・野毛坂を経て西平沼に至る市電長者町線が開通した。また、野毛山の頂上周辺では災害時の

避難所を兼ねた大規模な公園整備も進む。一九二六（大正一五）年九月一日に旧茂木邸及び市長公舎（旧原富三郎邸）を整備した第一期工事区域（北部地域、現在の野毛山動物園周辺）が完成したのを皮切りに、第二期工事区域（南部地域、現在の配水池地区）も一九三〇（昭和五）年三月末に完了、和洋折衷の趣向をこらした野毛山公園が誕生した。加えて、横浜市図書館（一九二七年八月）や横浜市震災記念館（一九二八年八月）も開館し、野毛山の公施設は数を増していく。それらの施設を目標に多くの市民が野毛山に足を運ぶようになった。

一九二九（昭和四）年四月二四日、前年度に完了した復興事業を祝う記念祝賀式典が野毛山公園において行われ、人々は復興の喜びを分かち合った。公



横浜市震災記念館 1928年8月

『復興記念写真帖』所収



野毛坂の往来 1929年4月24日

『昭和4年 天皇行幸写真帖』

共施設の整備とともに、野毛山は横浜の震災復興を象徴する空間となった。

## 三、昭和初期の野毛山

野毛山公園は横浜市民の憩いの場として機能しただけでなく、一九二九（昭和四）年四月の復興祝賀式典以降も様々なイベント会場として利用され、秋には菊花展などが催された。また、横浜市図書館には平日・休日を問わず多くの人が訪れた。『横浜貿易新報』記者の山本和久三（雅号・禾口）は『横浜百景』（横浜貿易新報社出版部、一九三四年）のなかで、伊勢佐木町の野澤屋デパートから見た野毛山の夜景について、「図書館の存在が特に目立ちます。十二三を算ふる窓からは煌々と光を放って、熱心に読み耽る人々の姿を容易



野毛山公園北部平面図 1926年9月15日

左右田宗夫家資料

に想像せられます。成程その夜は土曜日でした」と記している。時間を惜しむ閲覧者は閉館時刻まで読書に親しんだのだろう。震災復興以降、様々な公施設を有する野毛山は多くの市民が日常生活を過ごす空間となった。

しかし、一九三七（昭和一二）年七月に中国大陸で戦争が始まると、市街地を一望できる野毛山の軍事的地位は高まり、横浜連隊区司令部などが設置される。さらに一九四一（昭和一六）年一二月の日米開戦以降は、野毛山公園に高射砲陣地が造営され、一般市民の立ち入りは不可能となった。市民の憩いの場であった野毛山公園は戦争によって奪われたのである。

一九四四（昭和一九）年十一月、戦況の悪化とともに、横浜市役所が老松国民学校や市民博物館（旧震災記念館）に疎開してくる（詳細は百瀬敏夫「横浜市市民博物館の設立」『市史通信』第三号、同「開館後の横浜市市民博物館」、『市史通信』第五号を参照）。そして、空襲への備えが強まるなか、



慰安旅行の集合写真 1936(昭和11)年秋

相澤詔二氏提供

一九四五（昭和二〇）年五月二十九日横浜大空襲をむかえたのである。

**四、敗戦と震災復興**

一九四五（昭和二〇）年八月一日、一九三七（昭和一二）年七月の盧溝橋事件から始まった長い戦争は日本の敗戦によって幕を閉じた。一九四五年八月三〇日、横浜大空襲によって焼け野原となった横浜にアメリカ軍が進駐し、本格的な占領が始まった。市街中心部の大部分はアメリカ軍によって接収され、高射砲陣地だった野毛山公園も一時期占拠された。横浜はアメリカ軍の進駐によってその影響を色濃く受けるようになる。

その一方、横浜の人々は震災復興にむけて行動を開始し、焼け跡のバラック小屋は恒常的な住宅へと姿を変えていく。野毛山からは変化する市街地の様子が一望できた。また、接収解除となった野毛山公園は再開された労働運動の集会場となったほか、一九四九（昭和二四）年三月には、経済復興をめざす日本貿易博覧会の会場となり、震災復興期と同様に、横浜市の震災復興を象徴する空間となった。戦前と同様、再び多くの人々が野毛山を訪れるようになり、野毛山は「憩い」の空間としての機能を取り戻していった。

**五、市民生活と野毛山**

日本貿易博覧会を契機に野毛山の施設は充実し、博覧会閉会後は残った施設を利用した公園整備が進んだ。野毛山公園はアトラクションを有する野毛山遊園地（現・配水池地区）と、ゾウやキリンなど多くの動物を展示する野



敗戦直後の野毛坂 1945年9月 米国国立公文書館所蔵



吉田町から野毛山方面を望む 占領期

池田義夫氏提供



第18回神奈川県統一メーデー 1947年5月1日 空襲と戦災資料

野毛山動物園（動物園地区）に大きく分かれ、残った部分（散策地区）は人々が散策を楽しめるよう整備された。一九五一（昭和二六）年四月一日に新たに開園した野毛山公園には、桜の開花とともに、多くの人々が行楽に訪れた。また、五月の大型連休には子どもたちを対象としたイベントが催され、野毛坂から野毛山に至る道は大混雑となった。そうした風景は野毛山の年中行事として定着していった。

しかし、高度経済成長期に入ると、横浜市の人口増加に伴い、水道の供給量を増やす必要が生じた。そこで横浜市は野毛山配水池の整備を進めると同時に、野毛山遊園地を撤廃し、その下に水道施設を設けた。一九六六（昭



野毛山動物園と米国軍人 1953年4月15日

米国国立公文書館所蔵

和四一）年秋、工事を終えた野毛山公園は無料の施設として開放され、再び多くの市民を誘った。この再開発が現在の野毛山公園の原型となっている。

他方、市会事務局となっていた市民博物館の建物は横浜市史編集室や横浜市立大学経済研究所、野毛山遊園地の管理事務所として活用された後、市営の結婚式場（老松会館）となった。また、隣接する図書館は一九四七（昭和二二）年八月に機能を回復し、連日、多くの市民を受け入れてきた。さらに高度経済成長期に入ると、利用者の激増によって閲覧室の増築が図られたが、抜本的な解決に至らず、新しい図書館の建設が求められるようになる。

新図書館（中央図書館）の整備構想は一九六三（昭和三八）年頃からあったものの、計画が具体化するのには昭和末期（一九八〇年代）で、着工したの

は一九九〇（平成二）年であった。その後、約三年四ヶ月の月日を経て旧横浜市図書館及び旧老松会館の跡地に現在の横浜市中央図書館が完成する。以上のように野毛山は、震災と戦災を経つつ、施設の整備・拡充・再編を繰り返しながら横浜市民の憩いの場として成長してきた。そして、その成長は横浜市史資料室の開室（二〇〇八年一月）や野毛山公園の再整備のように、今現在も続いている。

【参考文献】『横浜貿易新報』／『神奈川新聞』／横浜市中央図書館開館記念誌編集委員会編『横浜の本と文化』／横浜市中央図書館、一九九四年／横浜市公園緑地行政資料調査会編『発行』『横浜の公園史稿』（二〇〇三年）／今井清二『横浜の関東大震災』（有隣堂、二〇〇七年）

（吉田律人）



横浜市図書館・満席の閲覧室 1960年5月12日

広報課写真資料